

連載

房総の自治鉅脈

— 第1回 —

夜明けを切り拓いた群像

一般社団法人 千葉県地方自治研究センター

理事長 井下田 猛



本短期連載は、明治初年から太平洋戦争の第2次大戦末にいたる戦前期千葉県の地方自治をめぐる動向などを追跡して、その特質を探ることにしたい。

明治地方自治制度の秘訣

1867年の明治維新による新政権は71（明治4）年の廃藩置県を契機に、地方に対する新政策実施機関で行政事務遂行の大区小区制の施行と廃止を行なう。次いで78（明治11）年に郡区町村編成法、府県会規則、地方税規則の実質的な地方自治制度の地方3新法を制定・廃止する（80年の区町村会法も3新法に含む）。

さらに、85（明治18）年に国から派遣の官選知事と官僚支配による地方官官制（勅令）が制定される。そして地方団体法として88（明治21）年に市制町村制、90年に府県制及郡制の制定を招く。この「地方団体法と地方官官制の二元体系」（地方自治研究者・高木鉦作）は、戦前期を通じてわが国地方自治制度の基本となる。

明治地方自治制度は名望家地主層と官僚統

制が結合して、`上から、の行政の推進と統一的な国民支配が推進される。地方制度の整備は内務大臣山県有朋を中心に展開されるが、この間の事情について山県は次のようにいう。「自治制ノ効果ハ、啻ニ民衆ヲシテ其ノ公共心ヲ啓暢セシメ併セテ行政参加ノ知識経験ヲ得シムルカ為メ、立憲政治ノ運用ニ資スル所大ナリトイフニ止マラス、中央政局変動、余響ヲシテ地方行政ニ波及セサラシムルノ利益、亦決シテ鮮尠ナラスト為ス」（『明治憲政経済史編』）。ここには、伊藤博文とならぶ`天皇の国家、創出の演出者であった山県の戦略戦術が凝縮している。さらに、「市町村ヲ以テ其盛衰ニ関係ヲ有セサル無智無産ノ小民ニ放任スルコトヲ欲セサルカタメナリ」（「市制町村制理由」）と、有産者参政の思惑が率直・明快に語られている。

地方民会の設立と自由民権運動の動向

81（明治14）年の国会開設を求める自由民権運動の高揚に先立って、早くも72（明治5）年から地方民会設立の動きが高まる。地方民会は民心鎮撫の行政上の要請からなされたも

ので、国民統治の観点に立つ行政の諮問機関的性格をもつものであった。

それでも、72年には公議思想の興隆や豪農層の政治的進出を背景に行政遂行の円滑化がめざされて、愛知、宇都宮、滋賀、大津、奈良の諸県とともに、ここ房総では木更津、印旛の両県で地方民会である県議会が開設された。

次いで県内の自由民権運動は、79（明治12）年に結社をみた夷隅の以文会からはじまる。これは「人民ハ全ク幼稚ニシテ政治ナルモノヲ知ラス、政治ハ士族ノ専有物」（『以文会史』）の現状打破から、君塚省三、井上幹らを中心に展開される。以降、翌年には香取郡結佐村の山来建による温知社の組織化、81年に君津郡菱田近義らによる協心社の設立、次いで翌年に千葉町の扶桑共益社、長狭郡奈良原村の浩鳴社、朝夷郡大井村の日進会、同進会、印旛郡木下町の叢談会、さらに尚風社、共親会、共研社、受信会、東京民一社第十二分会などの政治結社が県内各地にあいつぐ。

その多くが地方農村のなかから啓蒙政治結社として設立され、「幕藩体制末期における村方役人層の系譜をもつ豪農層を含めた民権運動指導層による」（石塚裕道「房総地方における自由民権運動の一考察」）で以文会型、と呼ぶものである。他の系譜は、君津の菱田近義らの協心社運動がこれに相当する「新聞縦覧所型」とでも呼称されるものである。これは、新聞無料閲覧による民衆の啓蒙をめざす。当時、新聞の購読人口は限られていたから、農村部における民権運動の担い手は以文会と同様に上層農民であった。民権運動は具体的には政談演説会の観をていしたが、これが臨席している官憲による中止解散を命じられるとすぐさま切り換えられて学術演説会となった。そしてこれらが終了すると、会場は通例、有料の懇親会がもたれた。

県内民権運動の啓蒙者のうち海上郡椿海村

の教師・高野隆の場合、教育の向上と農民の日常生活の向上進展を図ることを一体のものとし、そのためには「官害をのぞき」民権を伸長させねばならないと終世、鋭意努力した。

社会主義思想への接近とはじめて衆議院補欠選挙に立候補

越えて日露戦争直前の03（明治36）年に県内各地にタブロイド版8頁の週刊『平民新聞』の読書会・研究会が生まれて、社会主義思想への接近がはじまる。それが印旛郡八生（はぶ）村（現、成田市）の気儘屋を本拠とした北総平民倶楽部、香取郡古城村の北総青年会社会主義研究会、千葉町の千葉羽衣会、日本社会党千葉支部などの結成をみて頻繁に演説会が開催される。

同年8月に幸徳秋水を迎えた東金町八鶴館での社会主義演説会は超満員の盛況であった。さらに日露戦争中の05（明治38）年4月に若き日の荒畑寒村らが反戦運動と社会主義思想の普及を図って、「平民文庫」など8種類の文書をたずさえて、社会主義文書頒布伝道行商で県内を遊説している。

次いで極端な制限選挙におかれていながらも、同年12月に北総平民倶楽部を中心として東海新聞主筆・白鳥健が衆議院補欠選挙に立候補したものの、226票で落選した。（文中、敬称略）。



気儘屋の懇親会で使用された徳利